

News Letter No.63

22年11月11日(木) 発信

Sato Project

Sato Project

農業が環境を破壊するとき —ユーラシア農耕史と環境—
「里」プロジェクト

お問い合わせ

総合地球環境学研究所佐藤プロジェクト (加藤早稲子) e-mail:sato@chikyu.ac.jp

〒603-8047 京都市北区上賀茂本山 457-4 Tel:075-707-2384 Fax:075-707-2508



露地(茶庭)を眺める

(撮影: 馬場徹)

伝統的家屋に住んで考えたこと

馬場徹(建築商会)

伝統的家屋に住んで考えたこと

馬場徹(建築商会)

拙宅は、約 200 坪の敷地に約 50 坪の建坪、茶室付の借家です。別の小さな町家に 5 年ほど借家住まいをした後でしたが、自然に対して意識がガラリと変わったのは、今の家に住むようになってからです。それまでは、自然≒土地の精霊(ゲニウス・ロキ)、自然は土地に根ざした普遍的なものであるという認識でした。しかし、実際手に余るほどの庭を維持し出すと、それは全く不変ではありませんでした。草木をはじめ、自分たちの身の回りにある自然は我々が思う状態のままではいてくれません。今は、自然は普遍的なものではなく、「刻々と変化する周囲の状況を微分したもの(その都度一瞬を切り取ったもの)」という捉え方が、妥当なのではないかと思うようになっていきます。



前栽(せんざい:座敷庭)を眺める (撮影:馬場徹)

私たちが現在、庭と呼んでいるものの発祥は、上古の民が日本に渡来した際、故郷である朝鮮の先住諸島の景色を庭に写し取り、それを奉斎(崇め奉る)したものであるといわれています。それは、自らの故郷の景色をミニチュア化したもので、言ってみれば「偶像化された自然=庭」を、崇拝の対象にしたとも言えます。

毎日掃き清め、雑草を抜き、欠かさず朝夕の水やりをし、木々を定期的に剪定するなどして庭を手入れすることは、刻々と変化するものを一つの形にとどめるといふ、とても「不自然な自然」を維持することです。それは時間と労力を消費します。日々の手入れをしていると、しよせん人間は自然の手の内で踊らされてるだけだ、と思うことの方が多いいくらいです。言い換えれば、自然に対する畏敬の念を忘れないために、「偶像化された自然=庭」が存在している気がしてなりません。

今の住まいは借家、すなわち「預かりもの」です。これは借家人固有の意識だと思っていましたが、ある寺のご住職とお話をした際にもこの「預かりもの」という言葉がよく出て来て驚いたことがあります。数百年の歴史を持つ寺を代々守っている人ですから、所有の意識を持っていないというのは理解できる気がします。

一般的に「所有」されるものすべてが「預かりもの」だと考えると、それらに対してはこれまでとは異なる態度で接することになります。「所有」の場合、対象物をどう扱おうが、最終的には所有者の責任ですが、「預かりもの」には常に返却する先、つまり他者が関わってきます。返却する際に、その他者がどう思うかを常に意識していなければならない訳です。

しかもその他者が、子孫や他人である場合、自分が預かっている間に恥ずかしいことはできないという、自分を日々律する気持ちが出てきて、そのものを大切に扱うことにもつながるのです。つまり、維持を通して他者を意識することが、裏返って自分の意識をあらわにするのです。

「預かりもの」の「偶像化された自然＝庭」に日々接することは、他者を通して自分を律する意識と、自然に対する畏怖を常に顕在化させるものなのです。

皆が同じ考えを持ち、同じ方向へ向かう「大きな物語」の時代は終わり、エコロジーやサステナビリティを始めとした自然にまつわる思想が、かつての思想的支柱と同じ位置を占めることは難しくなっています。時代は「小さな物語」で満たされるようになってきているのです。

しかし、近代西洋が、「形而上的存在＝神」を失ったあと人間の内なる意識がその精神的支柱となったように、我々個人の中にある「深層心理」がすべての行動の裏付けとなり得るのです。

自然に対して畏敬の念を持ち、自然の魂を祈り鎮め、恵みやその力を享受できるように自分を律しておく。こうした意識から全ての活動を始めることこそが、今の「小さな物語」に満ちた時代を泳ぎ切る有効な方法であるような気がします。たとえその向かう先が、バラバラだとしても。